オタ活魔族の異世界ごまかし日記

～魔王さま、帰ってください！～

著者：三衣（みつい） 千月（ちづき）

原稿用紙：30 枚

冷蔵庫に、何が残っていたか。
これはとっても簡単に思いだせる。

野菜室には何もない。冷凍室にも何もない。冷蔵室には、おつまみ用の乾燥スライムが山盛り。

「給料日まで……あと３日かあ」

二月の厳しい冬風に打たれ、とぼとぼと歩きながら木造二階建ての古びたアパートへと戻る魔族が一人。見た目はしっかりと偽装してあるので、魔族であることを疑われたことはないし、そもそも、この世界には魔族や魔法といったものは存在しない。全部、ファンタジーとして扱われているのを、彼女は知っていた。

彼女には、使命がある。自らの住む世界から次元の壁を越えて地球へとやってくるに値する、大いなる使命が。

○　　○　　○

彼女は鍵を開けて部屋に入ると同時に自らにかけていた魔法を解き、本来の姿へと戻る。
それと同時に指をひらひらと動かし、魔力で部屋の灯りをともす。

瞳は黒から真紅へ。肌はうっすらと青みがかった白へ。腰まで伸びた髪もまた、瞳と同じく燃えるような紅にその色を変えた。

玄関に置かれているヒーローもののフィギュアに、「ただいま」と声をかける。音声に反応するそのフィギュアは、“出たな、悪の怪人め！”　と台詞を放つ。

にへら、と笑って彼女は「我が名は魔王。今日こそ貴様の息の根を止めてやろう」と続

けた。フィギュアからは、“どうした！ それで終わりか！” と返ってきた。

「ちぇ、失敗か」

ランダム再生される台詞が噛み合うと、存外に嬉しいものだ。５回に１回ほどはやりとりがうまくいく。

「ビール、ビールはまだあったかしら……」

そのまま台所に向かい流し台の下のたてつけが悪くなっている扉を無理やり開けば、そこには一本だけ残った缶ビールが鎮座していた。

顔を綻ばせ、いそいそと乾燥スライムと缶ビールをテーブルに運ぶ彼女。ソファに投げ捨ててあったジャージに着替えて無造作に首の後ろで紅の髪をまとめてから椅子に座り、拝むように手を合わせる。

「ようこそ！ わったしのぉ、幸福（ふわふわ）タイム！」

満面の笑みで明るく言い放ち、ぷしゅう、とタブを起こしたその瞬間。

ごづん、と鈍い音が冷蔵庫から聞こえた。
何か重たい物が落ちたような、ぶつかったような、そんな鈍い音。

冷蔵庫には、何もないはずなのに。
唯一入っている乾燥スライム以外、正真正銘、なにも入っていないただの箱のはずだ。
なんなら電気も止められているので、冷蔵庫自体が動く理由もない。

それでも、繰り返し、ごつ、ごつ、と冷蔵庫の内部で何かがぶつかっている音がする。
それに合わせるように、呻き声のようなものも聞こえてくる。

彼女は恐る恐る、音のする野菜室を開けた。

「ま゛っ」

　そして閉じた。喉から空気が漏れるような声を出してしまったが、気のせいである。
　魔族の首領である魔王の姿が見えたような気もしたが、気のせいである。頼むから、気のせいであってくれ。

　もしも魔王であったならば、ひどく恐ろしい事になる。彼女は部屋を見渡し、給料のほぼすべてを費やして集めたマンガ、アニメ、フィギュアなどなどを、瞬間的に押し入れに魔法で転移させた。

　そうしてから息を吐き、もう一度、ひどくゆっくりとカラの野菜室の扉を開ければ、そこには。

　魔法陣から顔だけを出している少年――魔王の姿があった。

　　○　　○　　○

「魔王様。長年、お待ち申し上げておりました」
「ザラ ＝ モルダ。いくつか尋ねる」

　ザラと呼ばれた女性は、ジャージ姿のままでこうべを垂れ、魔王に跪いている。
　野菜室から出てきた魔王は部屋を見渡し、そして言った。

「ここが、余の修行先である世界で間違いないな？」
「左様にございます」
「魔王城に似せるよう、言いつけてあったはずだが」

　ザラの肩がびくりと震える。

「現地世界で目立ちすぎるのはいけません、魔王様」
「ではザラ。なぜ転移陣をあのような暗室に置いたのだ」
「それは、その……」

漏れ出る魔力でひんやり電気要らずの冷蔵庫にしてました、などとは言えない雰囲気だ。
そして、元の世界に冷蔵庫はなど無い。ここは、ゴマかすの一手に限る！ ザラの脳裏にいくつもの言い訳が浮かぶ。

「秘密を守るために仕方なく！ 誰も見ない場所こそふさわしいと！」
「……そうか」

少年の視線が胡散臭そうにザラを見る。怪しまれていることは間違いない。それでも一度、ゴマかし始めてしまったものは貫き通さなければならない。

「さきほど、余を見て一度閉めなかったか？」
「と、唐突過ぎて心の準備が……ッ」

ザラには言えない。
数年間、何も準備せずにこっちの世界での生活を思う存分満喫してました、などとは口が裂けても言えない。

――だって仕方ないじゃないですか！ 娯楽は山ほどあるし、お酒は美味しいし、魔族を狩るような野蛮な人間もいないし、何よりこっちの世界の二次元作品はとても面白くって……。

つい、己の職務を疎かにしてしまうほどには、この世界は享楽的だったのだ。

「まあよい。余は寛大である。貴様の “異界渡り” の能力がなければ、勇者には勝てぬからな」

その言葉を聞いて、ザラは思いだす。この能力が使えるのは、自分だけだったことを。

そして、自分以外が異界を渡るときに生じる、大きな変化のことを。

　ザラは、おそるおそる顔を上げ、魔王の姿を見た。
　少年の姿である。顔だちの整った、まぎれもない美少年の姿である。

　そして、その身から溢れる魔力は、無いに等しかった。これなら、機嫌を損ねても消し炭にされる心配はない。多少、強気に出るべきだと考えた。

「魔王様ッ！」

　ザラは凛と立ち上がる。ジャージ姿のまま、ありもしない眼鏡をくいっと上げるような仕草で魔王に向かって言葉を向けた。

「この世界での魔王様は、戦闘力たったの５。ゴミでございます」

　魔王の眼光が鋭くなる。右手がずいとザラに向けられたが、大きく開かれた手の平には何の変化もない。しばらくそのままの姿勢を保っていた彼は、やがてゆっくりと手を降ろして言った。

「なるほど。炎が出ない。余の肉体に魔力の漲りがない。これが、この世界を選んだ理由か」
「左様です。この世界には魔法はおろか、魔族や魔獣もおりません。異界渡りを行使した私は魔力を保っておりますが……」

　立ち上がり、魔王の目の前まで歩みを進めるザラ。少年の姿である魔王を見下ろしながら、ふたたび眼鏡を上げるような仕草をしてみせた。

「この世界と我々の世界では、魔力濃度に大きく差がございます。我々の世界の住人がこちらに来るとき、魔力は大幅に減じます」

　魔王は頷く。見上げるような姿勢で腕を組みながらではあるが、威厳はじゅうぶんにある。

「そしてその逆も然り！ こちらから我々の世界に渡るとき！ 魔力は大きく膨れ上がるのです！」

　こちらの世界での、高地トレーニングのようなものだとザラは説明しようとしたが、魔王にそれを説明するには必要な世界知識が多くなりすぎるのでやめておいた。

「ふむ……。故に、こちらで魔力を蓄えてから帰れば、爆発的に魔力が上がるということだな。ところでザラ」
「なんでしょうか」
「先ほど、余をゴミとぬかしおったな」
「あ、あれは、そのッ」

　しまった。つい、こちらの世界でのサブカルネタを使ってしまった。通じないと分かっている相手にネタを出さないのがこの世界でのオタクの流儀だというのに！

「わ、私の魔力は５３万です……」
「なるほど、それならば確かに今の余はチリにも等しいな」

　――言ってるそばから何を口走りましたか、私！ いやでも確かにそれくらいの魔力差はあります。あるけれど、これ絶対に元の世界に帰ったら消される気がする……。

　魔王はふん、と一つ鼻を鳴らして部屋を見回した。
　テーブルの上には、タブが中途半端に開いたビールと、乾燥スライム。

　それらに近づき、魔王はザラを振り返る。

「これは、乾燥スライムではないか」
「そ、それは……」

　自分のためのおつまみセットだとは言えない。
　ビールと乾燥スライムは驚くほど合うのだ。

「……苦労をかけたな」
「へあっ？」

　首だけでなく、体ごとザラへと向き直り、魔王は深々と頭を下げる。

「このようなひもじい思いをしながら、余を待ち続けていたのだな。あれこれと難癖をつけて、すまなかった」
「え、あの、いや、その……」

　慌てて、乾燥スライムをジャージのポケットに突っ込み、ビールを台所のシンクに置く。多少、いやかなりもったいないが、この状況で魔王を目前にして飲むわけにもいかない。

　そして、微塵もひもじい思いをしたことは無い。魔族である彼女は、魔力の補充さえできれば生きていける。家畜のエサに使われるような乾燥スライムを食べなくともよいのだ。電気も、火も、魔力一つあれば事足りる。それでも、乾燥スライムはビールと合うのだから仕方ない。ホップの苦味とスライムの酸味、そして噛めば噛むほどにしみ出すほのかな魔力がアルコールに溶けて極上の旨味を引き出すのだ。

「余が世界を統一した暁には、何でも望みを叶えてやろう」
「ま、魔王様……！」
「そのためにも、まず余は何をすれば……おい、ザラ、何をしている」

　素早い動きでカバンの中からスマートホンを取り出し、いくつか操作をしてから魔王に言った。

「もう一度、お願いします魔王様！ 録音！ 録音をいたしますので！ ワンモア！」
「ロクオン……？」
「こちらの世界での、約束をする時の儀式でございます」
「よ、よかろう。世界統一の折には、望む褒美を取らせよう、ザラ」
「ありあざーす！」

ザラの望みは一つ。元の世界ではなく、こちらの世界で過ごし続けることだ。
殺伐とした魔法のある世界よりも、何も危険のないこの世界で、二次元に囲まれた平穏な生活を。

そのためにも、一刻も早く魔王には修行を終えてもらわなければ。

「それでは魔王様！ 修行に出掛けましょう！ まずはこの世界の事を実地でお教えします！」

「よ、よろしく頼む」

外に出ようと魔王の手を掴むザラ。しかし玄関先に、一体のフィギュアが置いてあるのが見えた。先ほど転移し損ねたものだ。慌ててそれも押し入れへと転移させ、ザラはゴマかすように笑った。

屈託なく笑う、健気な笑顔だと、魔王は思った。
魔王は考えを巡らせる。独りで異界へと渡って苦労をした彼女の、精一杯の強がりなのだろうと。
良い部下を持ったことに深く満足しながら、彼女に手を引かれて彼は未だ見ぬ世界へと足を踏み出したのだ。

○　○　○

時刻は夕方。
魔王の手を引いてアパートを出たザラはどこ行くアテもなく歩いていた。

もちろん、自らの姿は魔族の姿などではなく、こちらの世界の一般的な姿に合わせて黒髪、黒目の姿をとっている。

魔王に関しては、魔力量の少なさから魔族然とした姿ではなく、こちらの世界での少年だと言っても差支えのない容姿であった。

紫に妖しく光る瞳の色だけを魔法で誤魔化し、足早に歩きながら魔王のいた世界とこちらの世界についての大きな違いを説明していく。
しかし、魔王はどこか上の空で、ザラの説明を聞いているのか聞いていないのかよく分からない。

「聞いておられますかっ」
「あ、ああ。済まない。その、なんだ。あまりにも風景が違って驚いている」
「……それも、そうですね」

魔法のあるファンタジーな世界から、魔法も魔獣も存在しない、何もかもが違う世界へとやってきたのだ。魔王といえども混乱するのは仕方のない事だろう。

手を引いて前を歩いていた力が弱くなり、魔王の顔の前に柔らかい表情をした黒目の女性がしゃがみ込んだ。魔王は、それがザラであるということを理解するのに少しだけ時間を要した。

「ではまず、三つだけ、約束してください」
「みっつ、か」

物々しく頷きながら、ザラはぴんと人差し指を立てる。

「まず一つ、私の名前は森田サラです。この世界での怪しまれない名前とお考え下さい」
「サラ、か。少々抜けた響きの名だな」
「この世界では普通です。そして二つ目。魔王様は森田トウヤと御名乗り下さい」
「なるほど、理解した。その、モリタとやらが同族を示すのだな」
「その通りです。そして三つ目ですが」

両手をしっかりと魔王の肩に置き、真剣な眼差しで魔王を見つめた。その雰囲気に、魔王は思わず息を呑む。そして、声を低くしてザラは言う。

「私の部屋の押し入れだけは開けてはいけません。魔力の低い今の魔王様では、あまりにも危険です」
「わ、分かった。お前の言う通りにしよう」

押し入れだけは。押し入れの秘密だけは死守しなければいけない。こちらの世界で集めに集めたオタクグッズの数々が、そこには陳列されている。具体的には、キャラクターフィギュアの数々だ。そしてさらに、部屋に飾ってあったあれこれも先ほど押し込んだのだから。
さすがに、あれを見られては使命を放棄していたことをゴマかしきれない。

魔力を保ち生活するだけならば、この世界での金銭など必要ない彼女が、どうしてバイトまでしているのか。その答えが、押し入れにある物の数々にある。稼ぎの全てを、二次元的創作物の購入に充てているのだ。

「分かっていただけて何よりです」

そしてザラはまたも微笑む。まるで、聞き分けのよい子をあやすように。
魔王は思う。そこまで身を案じてくれるとは、本当に忠実な部下であると。

○　○　○

さて。部屋を飛び出してみたものの。
どうすれば魔王の魔力を鍛えることができるのか。ザラには何も分かっていなかった。

それを調べるのも使命の一つだったはずなのだが、異世界の誘惑に見事に敗北を重ねた結果が今を招いている。
それもまた、バレる訳にはいかないザラの秘密だった。

――とりあえず、危険がいっぱいワクワクドキドキの押し入れからは遠ざけることができたましたが、これからどうしましょう。

心なしか、魔王がザラを見る目が、期待に満ち溢れた少年のそれのように見える。確かに見た目は少年であり、自らが強くなるため異世界へと来たのだから胸もふくらむというものだろう。

「まず、お互いの名前を呼び合うところから始めましょう」
「……何故だ。一刻も早く修行をせねばならんのではないのか」
「甘い！　甘いですよ！」

エア眼鏡を押し上げてザラは言う。

「異世界で最も危険な事。それは、我々が異世界の存在だとバレてしまうことです。この世界、特にこの国において重要な事、それは違和感を消す事に他なりませんッ！」

「そ、そうか。ザラが言うのならば間違いはないだろう」
「ノー！　私は森田サラ。そして君はトウヤ君！」
「サ、サラ」
「さんをつけろよデコ助野郎ぉ！」

――あぁ！　またやってしまった！　違う、違うんです魔王様！　私の体に流れるオタクの血が勝手に騒ぎだしてしまうのです！　流れてないけど！

急に勢いの変わったザラに驚きながら、おずおずと「サラ……さん」と言い直す魔王。それを見てザラは慌てて手を振る。

「す､すみません！　今のは忘れて下さい！　そして､違和感を消すにはサラお姉ちゃんと、是非」
「サラ、お姉ちゃん？」

小首を傾げながらそう呟くトウヤ少年。傍からみれば愛嬌のあるワンシーンではあるが、その正体は異世界の魔王である。
胸を抱き、あまりの可愛らしさに打たれるザラを、不思議そう目で見つめている。

「グッド！ その調子ですよ、トウヤ君」

手近なベンチに座り、この世界の、この国での上下関係や敬称や社会常識などを順番に話していくザラ。いくつか説明をした所で、不思議そうに魔王は尋ねる。

「座学ならば、秘匿性からしても部屋でよかったのではないか？」
「そ、それは、その……」

単純に、押し入れから遠ざけたかっただけなのだ。

「目的地に向かいながらの方が、効率が！ 効率がよいかと思いまして！」
「おお、そうか。確かに時間は惜しい。一日でも無駄にしたくはないからな」

――すみません、数年を無駄にしました。魔力の強化方法なんて、正直なにも分かってません。

しかしそれを口には出せない。

「そうです、その通りですよ。さあ、参りましょう！」

目的地のない果てない逃避行を再開しようと魔王の手を取った時、ザラの後ろから不意に声がした。

「あれ、森田さん。や、奇遇だね」
「大山さん！ お、おこんばんは！」
「はは、何だいその挨拶。おや、ご親戚かい？」

それは、ザラのバイト先の先輩だった。彼は身長が高く体格よし、そして柔和な笑みを

浮かべれば世の女性の大半はとろりとしてしまうような健康的な爽やかさを持った、いわゆるイイ男と呼ばれる種類の人間だった。

　魔王が不審な者を見る目で冷たく言い放つ。

「なんだ、貴様は」
「はは、可愛いね。僕は大山。君は？」
「余は、まお――」

　ザラの手がぴたりと魔王の首筋に当てられる。魔力を込めた手はひどく冷たく、少年は思わず「ぬおぅ」と身震いした。

「そ、そうか。余は森田トウヤだ。これでよいな、サラお姉ちゃん」
「面白い子だね」

　くすくすと笑いながら大山が魔王を見る。

「そ、そうですね！ 最近見ているアニメの口調をすぐに真似るんですよー！ は、はは。あはは……」

　限りなくアウトに近いセーフ。いや、もしかしたらアウトかも知れない。そんな話し方をする少年は、決して一般的ではないと思いながらも、口調まで教えるに至らなかった自分の行動のうかつさを後悔した。

「そ、それじゃあ私たちはこれで……」
「そうだな、早く行こうではないか」

　――ああ、魔王様。どこへ行きましょうか。少なくとも、ここではないどこかへ行かなければなりません。これ以上ここにいてもどうにもなりません。しかし、どこへいってもどうにかなるアテもありません。私は一体どうすれば……。

　歩き出そうと魔王の手を引き、大山の元を立ち去ろうとするが、魔王の身に異変が起こ

る。

「ま、待て」
「どうしましたか、トウヤ君」
「余の体がおかしいのだ。足に力が入らぬ……。何だ、この感覚は」

　盛大に、魔王のお腹が鳴った。ぐるる、と大きく。

「なんだ！ 腹から音がなったぞ！ サラお姉ちゃん」
「トウヤ君、だっけ。きっと、おなかが空いてるんだね」

　魔族に食事は必要ない。魔力さえ取り込めればそれで事は足りる。しかし、今の魔王にとって、魔力の少ないこの世界はいわば酸素の薄い高地のような場所であるのだ。
　ザラは気づかなかった。魔力を蓄えている自分にとっては、この世界での食事は必要なかったからだ。

「そうだなあ。これ、食べる？」

　そう言って大山は持っていたカバンの中から菓子パンを取り出した。何の変哲もないその袋を見て、ザラの目が光る。

「いただきましょう、トウヤ君！ そして、得点シールは私がいただいても！？」
「あ、ああ、いいよ」
「これを、食べればよいのだな、お姉ちゃん」

　袋についているシールを集めて応募すれば、限定グッズがもらえることをザラは知っていた。コツコツとバイト仲間からもらったりしているものだった。

　不器用に袋を開けて、取り出したパンを恐る恐るかじる魔王。瞬間、彼の顔が綻んだ。

「これはぁっ！」

パンくずを頬につけながら、魔王はがつがつとそれを食べ終える。

「オオヤマと言ったか！ これは良い物だ！ 褒めてつかわす！」
「はは、うん、ありがとう」
「サラお姉ちゃんの家にはこんなものは無かったぞ」
「うっ……」

大山の怪訝な視線がザラを見る。バイト代を全て趣味につぎ込んでいる以上、冷蔵庫には何もなく、あるのはいくばくかのビールと乾燥スライムだけ。
それもそのはず、ザラには食事は必要ないのだから。

「森田さん、生活苦しいの？ 結構バイト頑張ってるのに」
「あの、そのぅ……。欲しいものが多くて……」
「それじゃ、うちに食べに来ないかい？ たまたま、ちょっと作り過ぎちゃって」

頭を掻きながら大山は言う。

「良いのか、オオヤマとやら！ 余はまだ欲しておるぞ！」

魔王に食事が必要だなどと、考えた事も無かった。しかし確かに魔力がない状態でこちらの世界に来るのだから、他の手段で満たす必要はあるのだろう。ザラはこっそりと財布を確認する。そこには、小銭がきらりと輝くばかりだった。

大山に聞こえないよう、魔王に耳打ちする形でザラは告げる。

「魔王様を魔力５のゴミとするなら、あの人間は２０。この世界での相応の力ですが、横柄な態度はなさりませんよう、お気を付けください」
「む、余の４倍か。見た目によらぬな。分かった」

バイト仲間の怪しい好意に甘える形で、魔王とその配下は大山に続いて夕暮れの街を歩く。

それが、さらなる危機を招くとも知らずに。

○　　○　　○

大山の部屋は驚くほど広かった。ザラの住んでいる１ＤＫの部屋に比べて綺麗に見えることも魅力的であり、何よりザラが心惹かれたのはその収納スペースの多さである。これなら、山ほどコレクションを飾れる。むしろ、部屋ごとにジャンルを分けてコレクションを飾りたい。そう、憧れと妄想の混ざった思考で部屋を見回していた。

「大山さん、この家、広いですね」
「友人が来ることも多くてね。一人暮らしには確かに広いかもね」

魔王は再び腹を鳴らしながらも、ザラに言われた通りに大人しくしている。
テーブルに案内され、何か手伝いましょうかと声をかけたが鷹揚な声で座っておくように促された。

やがて出てきた食事は､かなり豪華なものでザラが見たこともないような料理もあった。

「これを、食してもよいと言うのか！」
「もちろん、どうぞどうぞ。サラさんも食べて。残るよりよっぽどいいから」
「はい、いただきます……」

食事をしたことがない訳ではない。この世界に来て最初のうちは、周囲に合わせるようにと食事をしたこともあった。それでも、必要のない行為に金をかけることよりも、娯楽に金をかけることを優先したのがザラだ。
つまり、味については一切分からないのである。食べられるものだという認識はあっても、それが美味しい部類に入るのか、はたまた不味いのか。それを判断する術を持たなかった。

「うむ！　これは美味い！余はこれほど美味い物を食ったことが無いぞ！」
「そう、それはよかったよ」

　にこりと微笑む大山。魔王が言うのだから、美味いのだろうなと思い、ザラも料理を食べた。

　――ちょっと、変な味がするなあ。少なくとも、私にとっては乾燥スライムとビールの方がおいしい。

　それが、ザラの意識に残った最後の記憶だった。

　　○　　○　　○

　頬を叩く感触にザラが目を覚ませば、いつの間にか手足は縛られて、冷たい床に転がされている。部屋には一切のものはなく、壁にもたれるようにして魔王が目を閉じていた。彼もまた、縛られている。

「や、お目覚めかな」
「大山……さん？」

　そしてザラは己の姿を見て狼狽した。ジャージ姿はそのままだったが、青白い肌に真紅の髪。魔族としての姿に戻っていたのだ。

「大山さん！　あの、これは……」
「ねえ、今の状況、分かってる？」

　目の前の人間は、何も驚いていなかった。いや、違う。目の前にいるのはこの世界の人間

ではない。今、ザラの体は魔族のそれである。それを見ても取り乱さず、邪悪な笑みを浮かべながら魔王とザラを見る視線。それはつまり。

「あなた……勇者の仲間だったんですね……」
「そう、君がこの世界に渡ったと調べはついたからね。僕たちとしても、魔王が強くなる可能性を放ってはおけなかった。すぐに後を追ってこっちにきたのさ」

　嬉しそうに顔を歪めて、倒れているザラの首だけを乱暴に持ち上げる。

「最初は絶望したよ。こっちは勇者の転移術を使っても魔力の低減はまぬがれなかったのに、君は魔力を保ったままだった。どうやっても勝てない。まるで野ネズミと狼ほどの魔力差さ。それなのに……それなのにさぁ！」

　手を放し、ザラを蹴り飛ばす。
　苦悶の声をあげながら壁近くまで転がるザラ。なおも大山は激昂する。

「君はこの世界で何をしていた！？ マンガ、アニメ、二次元……果てにはまっとうに働いて趣味に走る！ こんな奴のために僕は異世界へ渡ったのかと思うと反吐が出るッ！」
「黙りなさいッ！」

　ザラが鋭く言い放つ。

　――黙ってください、マジで。何一人でべらべらしゃべってくれてるんですか。魔王様に今のを聞かれてたらどうしてくれるんですか、いやほんとマジで。

「いやあ、怖いねえ。魔法を封じられたのに吠えるねえ」
「魔法封じ……？」

　言われてみれば確かに、魔力は体内にあれど、魔法として出すことができない。

「一つしかない、とっておきの魔法薬さ。本当は魔王に使うつもりだったんだけどね。まさか、魔王も魔力低減してるとは思わなかったよ。君は数時間はそのままだ。今のうちに、

きっちりと二人を仕留めるから問題ないんだけどね」

　確かに、炎を出して縄を焼くことも、氷柱で切る事もできない。絶体絶命のピンチに陥ったことを悟り、ザラは戦慄した。

「む、むぐ……ぅ」
「おや、お目覚めかい、魔王様」
「オオヤマ……？」

　容赦のない蹴りが魔王の腹に入り、苦しそうな声が喉から漏れる。

「僕は勇者パーティーのマヤオだ。君を仕留める名だよ。覚えて死んでいけ」

　再び攻撃の手が魔王に迫ろうとする。ザラは身を挺して魔王を庇った。寄りかかるようにして、その身を覆う。

「ザラ……」
「へえ、美しいねえ。でも、いいからさ、そういう、のッ！」

　再び蹴りがザラを見舞う。

　――何してくれてんですかぁ！ 魔力２０野郎の蹴りなんてどうでもいいんですよ！ そりゃあ､少しは痛いですけど！ 痛みなんてどうでもいいんです！ そんなことより耳！ 魔王様の耳を塞がないと私の秘密がぁぁぁ！

　不自由な体をよじり、ザラは魔王の方へと近づいていく。そして三度（みたび）、蹴られて床を滑る。その拍子に、ポケットに忍ばせていたものが床に撒かれた。ザラの焦りの表情はどんどん必死の表情へと変わり、撒かれたそれに気を払う余力もない。

　マヤオは床に散らばったそれを不審に見つめ、そして笑い出した。

「これは傑作だ！ 乾燥スライムじゃないか！ 魔族ともあろうものが家畜のエサを食べる

なんてね」
「貴様、余の部下を愚弄するな。これ以上の侮辱は許さんぞ……」
「そんなら魔王様が食べればいいだろう！？ 縛られた姿にお似合いだよ！」

掴んだそれを無理やり魔王の口にねじ込み、下卑た高笑いをするマヤオ。

歯ぎしりする魔王に、ひやひやするザラ。どうか、どうか余計な事だけは口走らないでくれと祈りつつ、なんとかこの場を乗り切る算段を立てなければならないと思考した。

いくら祈っても、いくら魔力を込めてみても、するすると力が溶けていくような感覚。

――もう駄目だぁ。おしまいだぁ……。

私の素敵な平和ライフはおろか、魔王もやられてしまう。
こんな時、こんなピンチの時。この世界のアニメや漫画ならば、形勢逆転の策や、何か不思議な事が起こるのが定番なのに。

行き当たりばったりでその場をゴマかしてきたザラに、そんな策を弄する時間と心の余裕などなかった。

しかしそれでも、奇跡は起こる。

○　○　○

突如、魔王を縛っていた縄が弾け飛んだ。

「何ッ！？」
「余に盾突いた事、後悔させてやろう……」

魔王の周りで昏く揺らぐのは、紛れもなく魔力の波動。姿は完全な魔王の姿になり、その瞳は深い紫に染まっている。身に纏う黒衣は魔力が形を成したもの。その肌は、ザラと同じく闇夜に深く積もる雪のような色をしていた。

「魔王め！ 騙したのか！ 卑怯な！」

――覚醒イベントですかこれは！ ま、魔王様の魔力が戻って……。でも、どうして……。

ザラが目を見開きながら二人を交互に見る。久方ぶりに見る魔王の真の姿に、思わず胸が締め付けられそうになる。

――イケメンが過ぎます魔王様！ あ、いや、でもこれはきっとアレです。吊り橋効果とかいうヤツです。そうですそうです。手違い、間違い、勘違い。

マヤオが間合いをはかりながらギリ、と歯ぎしりする。

「さて、余にも理屈など分からぬ……。身の内にある魔力もほんの僅かではあるが、貴様程度を相手にするには余りある」
「くそっ！」

扉へ向かって駆けだすマヤオ。形勢不利と見て撤退をするつもりだったが、魔王から放たれた氷柱がマヤオを掠めて扉を氷漬けにした。

「勇者の仲間ならば、気概を見せてもよいのだぞ」

ザラは興奮にうち震えた。そして縛られ床に転がったままの姿勢で不敵に笑う。

――ああ、いける。今なら言える。

「知らなかったんですか……。大魔王からは逃げられないのですよ」

――言ってみたかった！　言ってみたかったこのセリフ！　ありがとうございます魔王様！

魔王の手から炎が生まれる。それは本来の威力からしてみれば、微かな灯のようなもの。形作られた手の平大の炎が二つ、三つとマヤオを撃つ。
叫び声をあげながらのたうち回る姿を見て、魔王の顔は曇った。

「本来であれば、一息に終わらせてやれるのだが、それも叶わぬ。しかし、余のザラを幾度も痛めつけた報いだ。苦しみの中で焼け落ちてゆくがいい」

しかしザラは気が付いてしまう。ここは異世界。同じ世界の出身とはいえ、下手に人を消してしまっては後々面倒なことになる。具体的には、バイトの先輩がいなくなるので、巡り巡って自分のオタク活動に支障をきたす。

「ま、魔王様！　考えがございます！」
「どうした、ザラ」
「今、この者を消しても、第二、第三の刺客が送られてくるでしょう。それよりは、生かさず殺さず、こちらに有利な情報を与えるように洗脳してはいかがでしょうか！」
「なるほど、一理ある……」

そう言いながらも、さらに炎はマヤオを襲った。

「だが、ザラ。お前を傷つけた罪はとても許せるものではない。洗脳ならば、次に来たものに施せばよかろう」

止めとばかりに力を溜め、魔王は腕を横に薙いだ。

しかし、炎は出現せず、もはやのたうつ力も残っていないマヤオがかろうじて倒れ伏しているだけだった。

「……魔力切れか」

黒衣が霧散し、魔王が再び少年の姿に戻る。

――良かった、私の異世界ライフは守られそうです！　でも、気のせいか魔王様からの好感度メーターが振り切れてる気がするんですがどうしてでしょうか。

「私ならばこの通り、無事でございます。どうか、気をお鎮め下さい」
「……ザラ」

不意に名を呼ばれ、倒れたままの体を起こされて、きつく抱きしめられる。傍目には少年がしがみついているようにしか見えないが、魔王の表情は真剣そのものだった。

「どうやら、余にはお前が必要なようだ」

そしてそのまま、魔王は彼女へ唇を落とした。

○　　○　　○

魔王は考える。
魔力のほぼ全てを失って異世界へと渡った魔王自身を、明るく勇気づけてくれた部下の気遣いを。
家畜のエサで飢えをしのぎながらも、彼女の職務を最優先にして行動した部下の気高さを。
危険を顧みず、身を挺して自らを庇った部下の忠誠心を。

それらを愚弄されて、怒りを覚えないなど、あり得るものではない。異界渡りの能力があるから大事なのではない。彼女が、彼女自身が、魔王にとってはかけがえのない存在になっていたのだ。

「これが……愛か……」

　すべての面倒事をザラが片付け、アパートに戻ってきた魔王は呟く。

　人間たちは、時に思いも寄らぬ力を発揮して、こちらに対峙してくることがあると、先代や配下の兵たちから聞き及んでいた事だが、魔王自身はどうにも理解ができなかったことだった。

　ある者は大切な者を守るため、またある者は在るべき場所に帰るため。想いの力を魔力に変えるかのように彼らは振る舞うのだと言う。

　これが、この感情がおそらくはそうなのだろう。人間に倣うことがあるなど、思ってもみなかった。

「何かおっしゃいましたか？」

　料理をテーブルに並べながらザラが言う。

「いや、何でもない」

　魔王は密かに決心した。魔力を得て、自らの世界に帰る時には、自らの妃として必ずやザラを傍に置いておこうと。

　　○　　○　　○

　ザラは考える。
　一刻も早く魔王の修行を終えて帰ってもらいたいのに、なぜか魔王からの好感度メーターがプラスに振り切れている理由を。

マヤオの財布から金銭をせしめて用意した、コンビニ弁当を暖めただけの簡素な食事なのに、魔王の表情がやけに慈愛に満ちている理由を。

アニメや漫画のように、ピンチに覚醒した魔王の魔力の謎を。

「ザラ。その飲み物は何だ」
「これは、ビールと言いまして。この世界での酒です」

コンビニ弁当と共に購入したビールを、しげしげと魔王が眺める。

「余も飲んでみよう」
「あ、いや、これは、その……」

この世界の酒の味を覚えられて、向こうの世界へ帰るのを渋られても困る。何より、少年姿で飲酒されると、何だかこう、よろしくないものを感じてしまう。

「魔王様に献上するほどのものでもありませんよ」
「お前だけ我慢をせずとも良いと言っているのだ。余にも苦労を分けよ。それも修行の内であろうが」
「お、お酒は魔力２０になってからです！ 禁酒も修行ですよ！」

さっとビールを引き上げて、魔王に見えぬよう台所のシンクの前でそれを一気に飲み干そうとするザラ。

――おっと、忘れちゃいけない乾燥スライム。

冷蔵庫に山盛り置かれているその器の中から２粒ほど取り出し、爪弾いて口へと放りこむ。

ビールの苦味に、スライムの酸味。溶けるようにしみ出す、僅かな魔力。ああ、やっぱりビールにはこれが合う。

――ん？

蕩けたような表情を真顔に戻し、ごくんと飲み干してから、ザラはふと思いだす。先刻、マヤオに襲われた時にジャージのポケットから、それが転がり出たことを。
そして、マヤオが魔王に対して無理やりそれを食べさせたことを。

――これかぁ！ 一粒３００魔力のこの珍味が、私と魔王様の救世主だったのか……。なんか、複雑ぅ……。

世の中には、分からないままにしておく方が演出の上で盛り上がる事があると数々のアニメを見て学んだはずなのに。いざ知ってしまうと、真相のしょぼさにザラは落胆した。しかし、それを決して表に出さないようにテーブルへと戻る。

「どうした、ザラ」
「い、いえ、何でもありません」
「ところでな。少し考えていることがあるのだ」
「何でしょう」

魔王は料理を食べる手を止め、真っ直ぐにザラの眼を見た。深い紫の瞳が、燃えるような真紅を見つめる。

「余の妃にならんか」
「ふぁっ！？」

思わず、椅子から立ち上がる。

「余は、異世界で孤独に使命を全うするお前の姿に心打たれた。余を庇うその気高き忠誠心に感銘を受けた。余は、そのようなお前の気持ちに応えたいのだ」
「ま、まま、魔王様……、あの、いえ、でも……」

――勘違いしていらっしゃる！ それはもう、盛大に！ 好感度ゲージを上げたのは私自

身でしたか！ いやでも、選択肢なんて出なかったのに、卑怯ではないでしょうか！ どうする、どうする私！

距離を取るように数歩後ずさる。魔王も席を立ってゆっくりと、しかし確実に距離を詰めてきている。

「先ほど、自分で言ったのだぞ、ザラ。“大魔王からは逃げられない” と」
「あれは、その場の勢いと申しますか、逃れ得ぬその血の定めと申しましょうか……」

とすん、と壁際に追いやられるように背中をつくザラ。見た目は少年の姿なのに、その威厳と存在感だけでザラは委縮してしまう。

へたりこんだザラを見下ろすように、魔王が壁に手をついた。少しばかり乱暴に。ザラの逃げ場を塞ぐように。どこか嗜虐的な笑みを浮かべたその姿は、先刻見たばかりのハイパーイケメン魔王を想像させるに余りあるものだった。

「ザラ。余は真剣に申しておるぞ」

“そうはさせないぞ！ 俺が相手だ！”

すぐ横にある押し入れの中から、くぐもった声が響く。瞬間、ザラの青白い肌から、一気に血の気が引いた。それはもう、白と見まごうほどに肌の血の気が引いていくのが自分でも分かった。

「さらなる刺客かッ！」

ザラが静止の声をかけるよりも早く、魔王が押し入れの扉を勢いよく開く。

“かかってこい！ 正義をその身に受けてみろ！”

魔王が見たのは、押し入れの中に作られた陳列棚。そしてそこに所せましと並べられているフィギュア、マンガ、映像作品もろもろ。山のように雑に積まれているその一角の、

転がった一体が、ポーズを取って倒れたまま台詞を流し続けている。

「こ、これは一体……」
「魔王様……ッ！ は、早く扉をお閉めに……」
「いや、しかしこれは」
「早くッッッ！！」

圧倒的なザラの気迫に押され、魔王は素早く扉を閉める。押し入れの中では、“どうした！ それで終わりか！”とフィギュアが鳴っている。

魔王をテーブルに座らせ、ザラは言った。

「危ない所でした。あれは……、ええと、あ、この世界で大きな功績を遺した者の像でございます。魔王城にも、先代や散っていった仲間の像があるではありませんか」
「それは、確かにそうだが。なぜそんなものを」
「全てはこの世界を知るためでございます」
「しかし、この世界に魔法や魔力はないのではなかったか。ちらりと見えたが、中には勇者のような姿をしたものや、魔獣によく似たものも……」
「……じ、実は、過去にはあったのです。しかし大きな争いが起こり、一度この世界は滅びました。長い年月をかけて再構築された新世界にのこされた、前時代の遺産。それこそが、先ほどの像でございます」

魔王が重たい息を吐く。

「それを集めることで、余の魔力を増やす手段を講じようとしていたのだな」
「左様でございます。しかし、時を経ても力は大きく、先ほどのように意思を持つ像もございます。今の魔王様では、勝つことはおろか、触れる事すら難しいでしょう」
「なんと、それほどまでに危険なものであったか……」

――どうしよう。何だかもう、退くに退けない状況になってる気がする。我ながら、言い訳が苦しい。何だ、前時代の遺産って。いやもうほんと、どうしましょう。

魔王は考え込んでいたが、やがて言った。

「ザラ。一刻も早く修行を終わらせ、魔力を増大させて元の世界へと共に戻ろうぞ。このような危険な世界にザラを一人送り込んだこと、余は後悔しておる」

――あぁぁ、また好感度が上がった気がする……。あれ、これ詰み？ チェックメイト？ 私の異世界わくわく二次元ライフはどうなるの？

いっそ、乾燥スライムを山ほど口に突っ込んで、スライムブーストをかけて魔王を元の世界に戻せば解決するかもしれない。魔王からの言質も、レコーダーに押さえてある。しかし、下手に藪をつつけば、これまでにゴマかしてきた多くの事柄がばれてしまう。

ザラは心中で誓った。

完膚なきまでに場をゴマかし、ついでに魔王からの好感度メーターも下げて、何の憂いもなく異世界に残る算段をつけることを。

「頑張りましょう！ 魔王様」

意気揚々と答えるザラに対して、魔王も答える。

「うむ。ザラも同じ想いのようで、余は嬉しいぞ」

誓ったそばから誤解を生み、ザラは己の脇の甘さを恥じた。

――私は、必ずこの世界に残って平和に暮らすのです！

すれ違う二人の決意は、きっと交わることはないのだろう。魔王の配下は、己の使命の怠慢も、魔王の好意も、すべて、すべてをゴマかしたい。

End.